

◆TさんからK先生へ

二月十五日(水) くもり

年長みどり組

*「お猿がひろった赤いろうそく」の音楽劇で使う炎をつくらせていると、登園した子ども達が、「何やっているの?」と聞く。傍にやってきて見ているので、「つくってみる?」と聞くと、「やらない」と言っって自分の遊びを始める。無理につくらせる必要はないと思ったが、声のかけ方でもまずい点があったのかもしれない。それでも、てつやちゃんやおみちゃんはかなり興味を示して何枚もつくっていた。てつやちゃん一枚できた時に、「上手にできたわね、とってもすてき」と褒めたら「僕、もつとつくるうかな」と次々につくり始め、そのうちに他の友達にまで教えてあげるまでになった。私の何気ない一言がてつやちゃんの意欲を多少なりとも引き出せたのだとしたら嬉しいのだが、この事に限らず、教師の一言が子どもに与える影響は大きいものであると思っ

た。

*練習の時、「お母さんのつくったぼうしでないといやだと言っつてなおみちゃんが泣き出してしまった。教室でぼうしをかぶったり、しっぽをつけたり、と準備している時に、なおみちゃんが「先生、私ぼうししないの、うちのお母さんつくれないだもん」と言ってきたのだが、私はそれを「じゃあ、先生に言っつておいてあげるから」ということですませてしまった。泣いているなおみちゃんを見て、私が子どもから発せられた言葉を表面的にしか促えておらず、その時のなおみちゃんの気持ちまで理解してあげられなかったことを反省した。子どもはこちらの都合に関わらず、次々に話しかけてくる。それを全てきちんと聞いて……ということはむずかしいとは思いますが、子ども達の言葉を受けとめようとする姿勢は失わずにいなくてはならないだろう。

泣いているなおみちゃんは一回目の練習には入らず、うしろで見えていたのだが、しばらくして様子を見ると小さな声で一緒に歌を歌っていた。やはり参加したい気持があったのだろう。赤い目をしながらも一生懸命に二回目の練習に参加し

ていたので、終わった時には思わず「よく頑張ったわ」と声をかけてしまった。何か自分のことのように嬉しかったからである。子ども達と接し始めて日も浅いので、何か言わなくては、という気持が先走り、つくった言葉をかけてしまうことがある(例えば「わあ、すごいね」)しかし、これからは本心からの言葉かけができる様に、子どもの気持に立って保育をしていかなければいけない、と思った。

* おかえりの時間になっても夢中で車をつくっているつねやすちゃん。時間で活動が区切られないので、子どもも自分の欲求を十分に満たすことができるのではないか、と思った。「楽しかったからまた明日この続きをしよう」と思えば、それが実現できる保育環境ってすてきな、と思った。「つくりたい」「やりたい」という自主性を重視していくことは、とても大切なことであると思う。

◆K先生からTさんへ

* Tさんの保育日誌を読むと、私自身が、「生き直し」ができるような、そんな真剣な気持になるのです。一番疲れている

管の四時過ぎですが、張りつめて考えるとこういうことはすばらしいことで、おかげさまで明日の力になるような、きょうの疲れをすっかり忘れさせてくれます。

* 小さい声で歌っていたなおみちゃん、ごめんなさい。どんなにかさびしかったでしょう。なおみちゃんの性格を知っているながら可哀想なことをしてしまいました。七夕とクリスマスは自分で作ったいつもの紙のお面、おひなまつりの会は、お母様方に縫っていただいた布地のお面をつかっているのですが、今までのがあるので、足りない分だけを補っていたのですが、なおみちゃんは弟さんが二人あるので、新たにお願いしなかったのです。お母さんが一番いいですね、「気をつかうより、頭をつかえ」とはこういうことなのですね。この劇は、子ども達の好きな童話を音楽劇にしたので、始めから愛着があって参加していたの……反省させられました。

◆TさんからK先生へ

二月十六日(木) はれ

年長みどり組

* かずゆきちゃん達が、「先生、野球やろうよ」と誘ってくれた。男の子から「……しよう」と声をかけられたことに私は満足だった。この時、まゆちゃんが「先生と遊ぶ」と言っていて一緒に野球を始めたのだが、やはり男の子の様にはいかない。そのうち「先生、別のことで遊ぼう、私、野球いやだ」と言い出した。しかし、野球はやりかけだし、男の子達も私の投げる球を打つのを楽しみにしている様だったので、「時計の長い針が4のところまできたら、まゆちゃんと遊ぶわ、それまで待っていてね」と言っていてもらった。教室内ではともかく、外で一部の子ども遊びの中にあると、やはり全体に目が届かないことが出て、子どもを把握することができないのではないかと、こういう時の良い方法はないだろうか。

* ゆうきちゃんやりょうちゃんたちは牛乳のふたにゴムをつけて、それを別の箱にとりつけて無線機のようなものをつくらせていた。あつちゃん、たかふみちゃん、のりおちゃんと積木で大きな基地を造っていた。みんな自分なりに工夫をこらしていた。特にあつちゃんはできあがった基地がとても気に入ったと見えて、得意そうにその構造を説明してくれた。そして、「明日までこわさないで」と言っていて帰っていった。一回

一回、つくるたびに違うものができる積木は、大人の私が見ても楽しい。あつちゃんが帰ったあとは、まさやちゃんりょういちちゃんが興味を示し、「地下には宝物が入っているんだ」と言っているいろいろなものを入れていた。そしてその開閉に「ひらけゴマノ」と、先ほど見た紙芝居で使われた言葉を早速利用している。子どもは、おもしろいな、と思ったことはどんどん取り入れていくのだな、と思った。

◆ K先生からTさんへ

* ままごとで遊んでも、製作している子、積木をしている子のところへ行っては声をかける必要があれば話したり、又外でサッカーボールで遊んでいる子、飛行機に乗っている子、砂場にいる子と、先生の頭の中には常にクラス全員の子どものことが把握されているわけです。例えば、ままごとでご馳走になったら、「飛行機のところのお友達に先生がくるのを待って発車するんですって、ちょっと乗ってくるわね」と声をかけて外にいくと、ままごとの子も満足しますし、待っていた飛行機の子も満足すると思うのです。先生がチョロチョロと走りまわるのはめまぐるしいですし、落ちつかないの

ですが、一つのところで腰をおろしてしまうと、他の子どもへの配慮がおろそかになります。

◆TさんからK先生へ

二月十七日(金) くもりのち雪

年長みどり組

*今日は私から男の子達に、「先生も入れて、どっちのチームに入れればいい？」と言って入れてもらった。子ども達は私为本気を出した方が喜んでくれた。サッカーを通して、今まであまり接することのなかったともゆきちゃんやあきひろちゃんのおおちゃん達と接し、彼らの様子を少しでも知ることができてとても良かったと思う。

*きのう、帽子を取り合って泣いたのりおちゃんが、そのおわびにしろるか、みかんの種を持ってきてくれた。たかがみかんの種かもしれないが、のりおちゃんにしてみれば、いろいろ考えた末のことであったと思う。口に出して語れない子ども達の小さな心を、私は精一杯受け取めていきたい。

◆K先生からTさんへ

*「先生、手をだして」って、のりおちゃんがちり紙に包んだものをさがさとあけて、大切にとりだしたものの……、小さな、小さな種……、「先生、みかんの種だよ」って、「ありがとう」と何度も言って、しっかりと握っていました。「きのう、あんなに泣いてごめんね」ささやいているような、小さな白いみかんの種……、ありがとう、大事にするわ。

